

●  
魔王軍に攻め墮とされ、蹂躪された女王の居城。

この国は女王制ゆえに女性兵士の割合が多く、女王が座す城の防備を固める近衛の兵士たちは若い女性のみで構成されていた。

なお、今次の魔王軍との戦争において最前線でもかなりの数の女性兵士が魔王の軍勢と交戦……だが、オークやゴブリンが主戦力である魔王軍と相性が悪く……多数の女性兵士が魔王軍の虜囚となってしまう。

前線での性欲処理目的に遣われ、使い捨てにされるか……もしくは此度の戦闘で減った戦力を補い、兵士を生産するための孕み袋として後方の魔族領へ送られ、戦死したほうが遥かにマシな目に遭っていることだろう……。

女王の城を守る近衛部隊は王国軍兵士の中でも精鋭中の精鋭、女王の盾であり矛で

ある乙女の兵士たちは前衛部隊が剣で斬り込み、後衛部隊が弓や魔術にて押し寄せる魔王の軍勢に対し、果敢に挑み奮戦するも――

城が攻められている時点で大勢は決しており、いくら近衛が精鋭であったとしても、ヒトと魔族（魔物）とではそもそも生物としての性能が魔族優位であり物量でも遥かに勝るため……どの道魔王軍の物量によって、すり潰されていたと予想がつく。

単一（個々）の戦力としても物量でも敵を凌駕しているのであれば魔王による最低限の統率と、そして参謀による少々の軍略が加わったなら、それはもうヒトに勝ち目は無く……最後の砦たる城は包囲撃滅されるのみ。

城の防衛に当たる男性の兵士は無残に殺害され、女性――若い乙女の兵士たちも奮闘虚しく敗れ去り、その女体を魔族たちから徹底的に、穴という穴を犯されまくり凌辱の限りを尽くされてしまい、処刑に近い形で女性の尊厳を粉々に破壊されてしまう……。

……と、城の守備隊や近衛部隊が決死の抵抗を見せたものの……女王の居城は敢え無く陥落。しかし……城を攻め堕とし、戦利品とした魔族の軍勢は近衛の乙女たち見事な肢体を犯すことに兵士クラスの魔族（魔物）だけでなく指揮官クラスまでも夢中となり。

最大の戦略的目標である女王エルフリーデの身柄確保に失敗し、側近の兵士たちと共に逃亡を許してしまった。

魔王軍がこの国を攻めた最大の目標・戦争終結条件と言える女王エルフリーデを取り逃がしてしまった事実を、王城攻めに参加した魔王軍部隊を（一応ながら）束ねる指揮官クラスの魔族たちに伝わると……当然彼らは大慌て。

もしもこの事実が知れ渡り、魔王の怒りに触れたならばもう命は無いに等しく（……という彼らの古い認識があるために）。

半ば恐慌状態……おおわらわとなつて今更各部隊を率い指揮官クラスの魔族たちは女王エルフリーデの搜索へ取り掛かる。なお、王城占領は後続の部隊に丸投げという

有り様。

陥落した王城の広場には、無惨な男性兵士の遺体が積み上げられており、近衛部隊の乙女達は膾を丸太（先端部は柔らか素材）により貫かれ、また、尻穴から直腸内に侵入し消化器官をさかのぼり乙女たちの口内から顔を覗かせ、串刺しにしている蛇型の魔物。

城を墮とした魔王軍部隊が……今度は女王エルフリーデの搜索へと忙しく出立すると……。あとには敵兵（男性）の屍の山と、うら若き乙女たちによる近衛部隊の兵士がひたすらに凌辱の限りを尽くされたのちに丸太で突き上げられた凄惨な姿を晒す光景。

そう言った最中に、進駐を任された部隊が城に入り、兵士たちが城の各所を確認している間……部隊指揮官と副官は惨憺たる光景に顔をしかめる。

「まったく毎度酷いモノですね……前線の輩は……」

「そういう輩が魔王軍の大半を占めているからな。粗暴だが扱い易い反面、このように占領地で略奪や強姦を働いて発散させねばならんのは……戦の常、か。程度は違えど現状ではヒトも変わらん。いずれは改善したいものだが数百年単位の時間が必要だろう」

「魔族という種族自体が魔物（モンスター系やクリーチャー系）主体ですからね……。仰る通り、かなりの時間を要するでしょう……」

陥落後の王城の占領を任されたのは、魔王軍の中でも高い知性を持つ人型の魔族からなる部隊であり。

その部隊長を務めるのは『魔人』と呼ばれる、ヒトで表すなら賢者と同等以上の知性を有し、膨大な魔力を持ち、フィジカルにおいても魔王に次ぐ優れた身体能力を持ち、つまりこの『魔人ジュリアス』は魔王に次ぐ戦闘能力と言えて、魔王軍幹部筆頭

である。

占領部隊を率いる魔人ジュリアスは魔王の直参・側近であり参謀役を務めているが、単体の戦闘能力としても魔王の次ぐ強大さゆえに……魔王軍が人類軍の知略などによって苦戦している際には、この魔人ジュリアスや彼の率いる部隊が戦線に投入されるのだ。

今回、彼の部隊が進駐を任された理由は王城陥落の報を受け、捕らえた（はずの）女王エルフリーデを、血の気が多く知性が低い前線の魔族に任せては乱暴を働きかねない為だったが……。

いざ現地に到着してみれば……過度なまでに犯され責め立てられ見せしめのように串刺し（実際には膾に丸太を挿入されている）にされた乙女たち、引継ぎもせずにごこかへ行った……城を攻め落としたはずの魔王軍部隊、駐屯の兵すら居ない空っぽの王城内。

魔人ジュリアスは部下の報告を聴き、改めて結構な手間を掛け王城内を搜索した末……それと共に、何故『城を攻め堕とした友軍（魔王軍）部隊が居ない』のか、も……粗方察することが出来た。……ゆえに。

魔王直轄であり、通常の魔王軍指揮系統には属せず魔王の命令によって直接作戦を遂行する直参部隊の指揮を執る隊長、魔人ジュリアスは魔術による念話を使用して、魔王へ現状を報告。

（……魔王様、前線部隊が王城を攻め堕としたこと自体は確かですが、略奪・強姦に夢中となり、その隙に女王を取り逃し、慌てて〈投入戦力〉〃全軍を上げて〃搜索へ向かった模様です）

念話が繋がり、魔人ジュリアスから報告を受け……魔王は……激昂するわけでもなく。

「なるほど、ご苦労。……ふ、まあよいではないか。女王を追う楽しみが増えたと思えばよい」

と、魔王は平然としており、乙女たちを犯すことに夢中になっているうちに女王を取り逃したくなどという極めて間抜けだが。魔王は前線部隊の魔族たちにも。

「そう簡単に奴等に見つけられるとは思わぬ。もうしばらく必死に探させてから中止の命を私が出そう……少し怒気を滲ませる感じでどうかな？」

「……あまりお戯れありませんように」

「ふはははは！ ……と、そういえばお前に褒賞を与えるのが大分後回しになっていたな」

魔王がこうまで余裕を見せるのは、まあ魔王をやっているだけの器量を持ち、その

上で……。

「魔人ジュリアスが立案した数々の作戦、更に魔人ジュリアス自身が単独で成し遂げた数多の戦果……それ以前の魔王軍は物量に任せてただ前進し、前進し、前進する。といった単純明快で脳筋極まるものであったがジュリアスによってもたらされた『戦術』と『戦略』により。」

魔王軍の戦力損耗率が格段に減ると共に、（作戦）目標達成率が格段に上がるという……これまでは戦闘能力による序列であり、力によって部下を従わせるのみで……部隊指揮能力などは皆無、名ばかりだった魔王軍幹部たちが啞然・愕然とするほどであった。

そんなこんなで、それまでは力と物量によつて蹂躪するだけであった魔王軍は、魔人ジュリアスにより『組織』としての力が大幅に強化・改善され、現在は人類の生存圏を着々と『極めて優勢な戦況で』侵略中である。

数々の作戦を立案・遂行し、成功させて次々と武勲・武功を上げ続け……。

魔王軍は……先にもあるように、蛮族の群衆でしかなかったゆえに、大幅な組織改革となれば……まあ、やはり、強大な力を持つが知性の低い魔物に関しては……より強い『力』で屈服させて従わせるほかなく。

力で従わせたうえで組織的な行動を取れるように片っ端から訓練・教育を施し、その身体に叩き込んでいく……といった『作業』をこなしつつ。

その傍ら、魔王軍の侵攻部隊が苦戦している各戦線に出向き、ワンマンアーミーのように一騎当千の活躍を見せ、単独で戦局をひっくり返して回る……といったハードワークをこなし続ける日々……。

……現在こそ、魔人ジュリアスが一から選抜・錬成した精鋭遊撃部隊を率いており、一応ながら指揮官教育を施した魔族の部隊長が魔王総軍（指揮官適性を有する魔族が少ない上に教育が追い付いておらず全部隊ではないが）各部隊に配置されてはいるものの……。

元々魔王に仕えていて、ジュリアスと派閥を争うようになった幹部配下の部隊は……今回の王城攻めを行った魔族（魔物）たちのように、統率が取れておらず略奪や強姦などをして暴走することが度々あり、悩みの種ではあるが魔王が肅清を命じぬ限り基本放置。

王城攻めや全周包囲が成功したのも……王城へ続く敵補給線を徹底的に潰し増援も足止めをして（王城を）孤立させていたジュリアス配下の部隊の活躍があつてこそだが……兵站の重要性を脳筋の魔族幹部に説いても仕方ないゆえ、ジュリアスは半ば諦め気味……。

このようにして、ジュリアスは有能で何でもこなせるがゆえに、何でも任されてしまつて……ワーカホリック気味になつており……ジュリアスに最も近い部下が上司を気遣い……魔人の彼には知らせず、魔族領地で内務を担当する人型魔族の知人にこっそり伝え——

更にその上の内政担当の魔族大臣から魔王の耳に入れて貰い……。

「魔人ジュリアスですが、我らが陣営入りして以降、軍部の大改革や、大幅に無駄を省いたうえで強靱な兵站の構築や、糧食等・物資集積状況の明確化もあり、領民へ回せる糧食や物資が格段に増え、占領地の現地民に対する待遇改善により暴動は劇的に減りました」

「うむ」

「さらにあの者は自身で部隊を率い、また単独でも赫赫たる戦果を上げておりますな。……働かせすぎではありませんか？ 休暇を与えるべきでしょう」

「そういえばそうだな。……奴め、褒美を与える暇もないくらいに率先して任務や魔王軍の改革や再編に当たっておったわ……如何に魔人と言えど酷だな……。ううむ……。ヨシ、奴には褒章と望む限りの褒美を与え、休暇を取らせよう」

という流れがあり。魔王軍の幹部にまで昇りつめて以降……ずっと働き詰めであった魔人ジュリアスに対し、念話ついでに、王城を攻め墮としたという戦況的にも切り

が良いため『強制的に後方送りにして休むように』命令を下し、また、褒美について訊いてみる。

「……。魔王様直々のご命令なのでしたら……承知いたしました」

「不服そうだな。だが聞け、これは決して更迭などではない。お前の部隊を取り上げる様なこともせぬ。お前は有能過ぎる。有能が過ぎるゆえ、つい酷使してしまっていた。ともあれ、部下と共に後方へ下がり、しばし心身を休めよ。他に何か望む物はあるか？」

「望む物、ですか……」

魔人ジュリアスは念話にて魔王から尋ねられると……自らが何を求めているのか、少し考えを巡らす……。

……まず家は、魔族領内に屋敷がある。……ほとんど帰宅していないため、管理人

に任せきりだが……。

財産に関しては、金銀財宝を魔王から先に賜った物が溢れんばかりに魔王城内の金庫にて厳重に保管されており、今次も開戦以前の魔王軍再編の功績により金銭換算でかなりの額となるであろう品々（財宝の類）を既に受け取っており、それも金庫行き。まあ、金はいくらあっても困らず、これらは自らの領地内のインフラ整備や、次代を担う人型魔族たちの教育機関の設立資金に回そう……と、魔人ジュリアスは以前の構想を思い返す。

いずれ……魔族全体にきちんとした教育がなされれば、魔族全体の道徳的なメンタリティも向上するだろうと魔人ジュリアスは戦場の前線にて、略奪や強姦の現場を目にする度、常々思っていたところである。

……教育云々に関しては魔王に提案し、魔族全体でのお話ゆえに、こちらは別件となる……。

さて、魔人ジュリアスが個人的に欲する物とは何ぞや……？ となり、ジュリアス

は魔王へ「少しお時間を頂きたい」と伝え、しばらく王城内を歩いて回りながら思案することに……。

\*\*\*

魔人ジュリアスの中で、私的な事と言えば……やはり個人所有の屋敷であり、現在の屋敷は領内の魔族（男）に管理を任せているのみ故……。

花……若い女でもいれば華やかになるのではないかと、思う。

魔王から直々に休暇を言い渡されたため、しばらく休むほかなく……。

初めこそ、魔人ジュリアスは休暇中、軍事教本の執筆にでも当たろうかと考えていたが……、屋敷に若い女を迎えるとなれば……それも新鮮であり、面白いかもしれない。

魔物系統の脳筋魔族と違って人型魔族は知性が高く理性があり、特に魔人ジュリアスは戦場において、極めて冷静沈着であつて、状況に応じて適切な判断・命令を下すことが常。性欲なども制御が可能ゆえ、前線に出ている際『性欲』の優先順位は最低に設定される。

……だが、しばらくは後方へ下がり、休暇となる。というわけで……久方ぶりに性欲を解放し、若い女を数名囲い、愛でるのも良いかもしれない。

思案をしながら歩を進めっていると……ジュリアスの視界に、不可思議な物体が入る。

それは——肉人形に変えられ剣の柄が膺に当た部位に差し込まれ、地面に突き立っている、女剣士『エリカ』の変わり果てた姿……。

「……」

一瞬、四肢をもがれた女の遺骸かと思ったが……成人女性の肉体にしては何か、違和感を覚えるくらいに一回り小さく、女は生きており魔力の残滓も感じられ、これは魔術的な手段によつて女の身体が肉人形へ作り変えられたものと理解。

肉人形と化した女剣士『エリカ』は、白目を剥いて気を失つており、口からは魔物の白濁液を垂れ流し、腹はまるで妊婦のように大きく膨れている……。

「……」

ジュリアスは『ソレ』を観察し、女には一応意識はある様子で首から下は内臓や消化器官等が存在せず胴体全体がゴブリンサイズの魔物の男根を収める腔の様な形状となつていて魔物のイチモツを全身に啜え込みを悦ばせる為だけのまさしく『肉人形』であつた。

まず一人目の『当て』付けた魔人ジュリアスは城中央の広場へ戻り、丸太を杭のよ  
うに膣へ突き入れられ……腹がボコオと膨らんでいる、無惨な乙女たちの姿……。既  
に肛門から消化器官を遡り犯し、口内から顔を出していた蛇型の魔物は既に取り除い  
ていたが……。

乙女たちは僅かに息をしており、惨い状態にある女体の華奢な肩を震わせていて……  
膣を貫いている丸太の杭を慎重に抜き、取り外さなければ命が危うい。

一目では、多数の女体の裸身が磔にされているような光景。その中央には……どこ  
かで目にしたことのある、青髪の女性が他の乙女たちと同様、実際には磔ではなく膣  
に丸太の杭を差し込まれ、突き上げられている。

そこでジュリアスはふと、思い返す。……この女は確か、『サラ』と言い、王国一  
の弓の名手であったはず……。

また、先ほど肉人形にされていた金髪の女の顔も同様に思い出し、アレも確か……王国一の剣士であったと記憶している。

となれば、この王城には王国三強と呼ばれる女王守護隊最強の戦乙女たち——剣士エリカ、弓使いのサラ、それと……二人が居るならば、恐らくは王城内のどこかに『魔導士のリリン』も居るはず。……生きているか否かは不明であるが。

魔王軍全体から脅威とみなされている人類軍のエースクラスの人物のリストや詳細を……やはりジュリアスが纏め制作し、魔王城内に存在する大宝珠を中枢サーバーとして使用し、データライブラリ化しており。

魔王軍の指揮官クラスや魔族の魔導士が携帯する宝珠を端末として大宝珠のデータライブラリに記録をしたり、ライブラリを参照したりして、敵の脅威度をすぐさま確認・把握可能な魔術ネットワークシステムを構築……したのもジュリアス。

と、そのシステムを使用し、ライブラリと照合してみれば……『王国三強』の『戦乙女たち』の容姿や魔王軍内で把握している彼女達のデータが空間投影型魔術ディスプレイに表示され——剣士エリカ、弓使いのサラの二人が『本人』であることを確認。

（ほう、これは戦乙女と呼ぶに足る美しい娘達だな。……今は見る影もないが……。それに『魔導士のリリン』という少女の姿も見当たらん……）

ジュリアスはしばし思案した後、部下に命じ自らも王城内を再度隈なく搜索。……他二人と同様に散々凌辱を受けたであろう……『魔導士のリリン』と思われる……幼い女体を白濁塗れにして膣穴が開きつぱなしになり……白目を剥いて気絶している少女を保護。

元・王国三強の戦乙女たち、剣士エリカ、弓使いのサラ、魔導士のリリンを保護し

たジュリアスは、魔王へ念話にて連絡を取り、話し合いの末、長期休暇（魔族は寿命も時間概念も長く、休暇は十数年であり長期休暇は数十年程となるケースも）を申請。

無論「必要とあらばすぐに馳せ参じます」と魔人ジュリアスは魔王へ誓い、共に他の事も提案すると、それもあっさりと承認・受理されたのだった……。



剣士として幾度も振るい数多の魔物を屠った愛剣の柄を……四肢を奪われ肉人形と化した胴体の秘部に差し込まれて飾られる卑猥なオブジェと化してしまったエリカ。魔王軍に敗れてこの姿にされてから、一体何度ゴブリンの慰み者とされただろうか……。肢体全体に魔物のイチモツを挿入されて使われて犯される終わりのない苦しみ……。

肉人形されてしまいゴ布林達から肉オナホとして遣われ過ぎ、残酷にもヒトとして残された意識すらも半ば遠退いているエリカはこちらも感覚だけはある本来の股間

部からみぞおち程まで達している『膺』に突き立てられた、かつての愛剣の柄が引き抜かれ。

『ああ……また滅茶苦茶に犯されるんだ……』

と、肉人形状態の朦朧とした意識の中でエリカは思う……が。

「しばらく眠れ」

何やら、肉オナホとして扱われている筈の前身が肌触りの良い布のようなものに包まれ、そういった優し気な口調の声を聴きながら……エリカの意識は途切れた。

以後は……微かに意識が戻たりまた失つたりふわふわしたような感覚が続き……。かなりおぼろげな記憶では、どこかへ運ばれて床にそつと置かれたらしく……。

「解析完了……この術式は……例のアレか。まずは解呪し身体を元に……」

「治癒魔術槽に……」

「三名で……リリン嬢の治癒も……」

「運搬は順次……」

エリカは何か……、いつの間にか……温く心地の良いお湯の中に浸かっている感覚の中に有り……断続的な覚醒を繰り返す、ぼわぼわとした意識の内にあるつつ、時折そういった会話？ 若い男性の声？ が聴こえる……。

\*\*\*

「……………?」

ぼーっとぼんやりふわわんとした意識の中で、窓から部屋に差し込む暖かな光からなる陽気……それに眩しさを覚え、エリカは目覚め……ゆっくりと覚醒し、目を開く。と、初めは手からく身体全体を包んでいる布団の感触があり、エリカはふかふかな掛布団や程良い反発のベッド・マットレスの上に寝かされているのだ……と、把握。

(う、ううん……私、は……どのくらい……寝てしまっていたのだろうか……。そろそろ起きなきゃ……)

まだはつきりしない意識や思考ゆえ、エリカは金糸のような美しいブロンドのロングヘアの側頭部へ手を当てながら、一度ベッドの上で上半身を起こし、それから両腕をぐーっと上に向かって伸ばし——

ている内に、彼女の眠りから覚めた脳の思考が働き始めて……だんだんと“これまでの記憶”も鮮明になって来て……。

——王城での出来事、自分の身に降りかかった災厄などの記憶が一気に脳内に記憶が駆け巡り思い返され、エリカはバサツと掛布団を内側から剥がすようにベッドの上から飛び起きる。

「エルフリーデ様は!? 仲間は!? みんなは!? ここは何処?!?!?!」

急に現実へ戻り思い出してしまったため、エリカは若干混乱気味に声を上げてしまふ。それと。

「——っ!? 手と、脚が……ある……っ!?」

エリカは自身が下着一枚つけていない裸身であり、それ以上に……化け物に呑み込まれて失われたはずの四肢が（全身が元の人間サイズにも）元に戻っている事実に驚愕・驚嘆。

ヒトの女性にはあまりにも大き過ぎるサイクロプスの巨根や……かつての愛馬であり魔物と化してしまった軍馬サイズのペニスに犯され、びろびろに開き切ってしまった膣も……。

そつと確認をすれば……まるで生娘のような綺麗な秘部、つるんとした滑々お肌のワレメに……！！

あのような絶望的で悲惨な状況から、何がどうしてこうなったのか想像もつかないエリカは混乱するのみで……ぐるぐる考えても推察すら出来ぬゆえ、その材料を探すべく、自分の寝かされていたベッドの在る部屋を見渡すと……。

エリカが乗っているベッドの両脇にも同型のベッドが置かれていて……なんと、サラとリリンが左右それぞれベッドに寝かされており、すうすうと気持ち良さそうに眠っているではないか……！！

なお、彼女達は裸身の上に毛布一枚を掛けられているのみ。あまりに危機感が無く、

ぐーすぴーと熟睡している二人をエリカは無理矢理起こしに掛かる。

「サラ！ リリン！ 起きて！！ そんな悠長に寝てる場合じゃないでしょ！！」

「んんん……エリカあ？ なんだよおう。なんだかすごく眠いんだ……もう少し寝かせてえ……Zzz……」

「むにやむにや……くーすぴー……んん……んん……なによお、エリカあ……あたしなんだか身体がだるくてえ……このお布団すごく気持ちが良いってええ……、……Zzz……」

などと、ベッド上の二人の身体を大きく揺さぶるも……二人ともなかなか起きようとせず。反応を見せるがまた寝入るうといつたことを繰り返していれば、エリカがブチ切れて。

「サラ！！ リリン！！ 二人ともいい加減に起きなさい！！ 私達が城で魔族に敗北して

からどうなったかも分からないし、エルフリーデ様の行方だつて!! それにここが一体どこなのかも不明なのよ!! 早く起きてー！ー！っ！ー！ー！ー！」

大声で叫んだ後、エリカはサラとリリンにデコピンを喰らわせて、二人を強制的に叩き起こす。

「……随分と騒がしい。元気な様で結構なことだ」

「——っ!? しまった!!」

木製と思われる扉がキィ、と静かに開かれて現れた男の姿を見、エリカはすぐさま自分がしてしまった失敗に気付く。

「現状を把握出来ていないまま、敵地かもしれぬ場所で大声を出すとは余裕があるよ  
うだな?」

「……くっ」

エリカは表情を歪めて唇を噛む。……彼女の様子に、サラとリリンも完全に目が覚め、『王国三強』だった三人は武器はおろか衣服や下着すらつけていない裸身、丸腰ではあるものの……。

自分達が王国の守護者であり最後の砦・戦士であるという信念はまだ、己が己であるための精神的支柱だけは、肉体を蹂躪され女性の尊厳を奪われても尚、朽ちかけて、ボロボロになっても、最後の何かを命懸けで『守る』という意志・闘志だけは残っていた。

ゆえに、彼女達は未だ戦士であり、自分達の領域である王国を侵した敵、魔族と思しき男へ鋭い視線を向けて警戒態勢を取る。

(……ほう。あれだけの惨い目に遭って、まだ抵抗の意志を見せるか。……ふふ、そうか。俺がお前達に感じたものはそれか。『王国三強』——名ばかりではないと認め

よう。ならばこそ、俺はお前達三人を、俺だけのモノとする。それだけの価値がある  
と見た）

魔族の男、魔人である彼はかなりの警戒心を剥き出しにしている三人へ、これまでの経緯を説明する。王城は既に堕ち、女王エルフリーデは逃亡中だがそれだけ。

王国の領地は既にほとんどが魔王軍に手中に有り。女王エルフリーデと少数の衛兵の捜索には数万規模の魔王軍が投入されているため発見・捕縛されるのは時間の問題。

であれば、抵抗など無意味。そして王城にて敗れ、凄惨なまでに犯され尽くし、死にかけていたところを保護したのちに。

魔物たち……主に亜人どもから辱めを受け、オークを初めとしたヒトとの性交にはとても向かない巨根をぶち込まれて……ずたずたにされた女性としての部位を含め、魔物の呪力も解呪し、元通りの肉体にまで癒したく……と、魔族・魔人ジュリアスは説明し。

「言っておくがお前達の身体を癒したのは慈悲などではない。お前達を俺の性奴隷、雌奴隷にするためだ」

魔人ジュリアスが言い放った『性奴隷』『雌奴隷』という言葉に、エリカ、サラ、リリンは三人ともが見開き……警戒から敵意に変化した視線を男に向け、更に険しい表情を浮かべて身構える。

「ふっ。だが、この状況下にあつて未だ折れぬ芯の強さを持ち主、お前達を真の『戦士』と見込んでチャンスをやる。もしこの俺に一撃でも当てて一滴の血でも流すことが出来たならば、性奴隷・雌奴隷ではなく、相応の待遇をしてやろうではないか」

「なっ……何をいまさらっ！ 侵略者が……っ！！ 私は、私達は魔王軍の手先になんて絶対にならないっ！！ 好きに犯すなり殺すなりすればいいでしょう？ 武器も持たせず、こんなっ、裸にしてっ、どの口が言うのよっ!？」

戦士と認めるくなどと言っておきながらあまりにも不公平な条件であるとエリカは激昂して捲し立てる。

「それはそうだった。ならば、剣と弓を与えよう。杖は——」

と、ジュリアスが言いかけた瞬間、エリカとサラが自然に避けて射線を通し、リリオンが掌に大きな火球を作り出して男へと放った。だがその、通常の魔物であれば一撃で丸焦げにする火力を持つそれは、ジュリアスに命中することなく霧散し消滅してしまふ……。

「……………不要な様子だな？ お前が触媒無しでも魔術を行使可能であることは把握している。で、さっきのそれは何だ？ 煙草に火でもつけてくれる気だったか？ 親切なことだが、俺は煙草は吸わんのでな」

「あ、ああつ……」

「……」

「く、うう……」

魔人ジュリアスがキツと鋭い視線を元・王国三強の三人へ向けて、言った。

当のリリンはぶるぶると未成熟で凹凸の少ない女体、しかし下半身は女性らしくあ  
る肢体を震わせ……、サラは諦めたような表情で沈黙し、エリカは唾然・愕然として  
いる……。

「リリン、お前は優秀な魔導士と聞いていた。しかしお前は、お前自身の敗因、地下  
水路に投入された対魔強化を施したオーク部隊に手も足も出ずに蹂躪されて学習した  
はずだが？ 犯され過ぎて記憶が飛んだか？ それともこの俺がオーク未満であると  
でも？」

「ひ、ひい……そ、そんな、ことは……」

リリンのほうを見やり、魔人ジュリアスが自身の纏う魔力（※先ほどの火球はこれに触れて消滅した）を制御し指向性を持たせて彼女へ向け、自身が有しており発する魔力の量がどれくらいであるかを、魔導士の彼女が感じ取れるようにすれば……。

「い、いやあ……こ、殺さないでえ……お、お願いしますう、もう、あんな目に遭うのは嫌あ……っ！ 死にたくないい……！ 死にたくないよおうっ！ ごめんなさい、本当にごめんなさい……!! もう絶対に逆らいません!! 何でもしますう……!!」

リリンは、尋常でなく怯え、がくがくと震えて……余りの恐怖に幼い女体の裸身、可愛らしい秘部のワレメから尿をじゅろろろろ……と漏らしてしまう……。

「……っ！ リリン!？」

「う、あああ……」

「大丈夫!?」

「む、無理だよお……あの人、いや……、あの方は……たぶん、魔王と同等くらいの魔力量だよお……! あたし達じゃ絶対敵わない……!!」

涙や鼻水で愛らしい容姿をぐしゃぐしゃにして、リリンは素肌にひりひりと感じる魔力の波だけでも、目の前の男がどれほど強大な力の持ち主なのか、そして抵抗したり歯向かったりすれば即、死に繋がる……と、エリカとサラの二人に訴えかける。

「ようやく理解したか。俺は魔王軍幹部筆頭『魔人ジュリアス』。先に言った通りお前達を『性奴隷』『雌奴隷』にするため、あの状態から解呪や治療を行った。魔術で洗脳すれば手っ取り早いがそんな人形など抱く価値は無い」

魔人ジュリアスは、自らの纏う魔力を再び制御し、流れを自分へ戻してリリンを命の危険を感じ恐怖に怯えさせ失禁までさせるほどのプレッシャーから解放し、続けて

言う。

「お前達が、お前達の意味で俺に奉仕をするならばそれなりの扱いを約束しよう。安心しろ、俺専用の『性奴隷』『雌奴隷』だ。せっかく治したオンナのカラダを再び壊すような行為はしない。痛みではなく、至上の快樂を与えよう」

エリカ、サラは俯いて、さつきまでの威圧するようなものではなく淡々としているが、どこか安心するような……？ 穏やかな印象も受ける口調で話す男の言葉をしっかりと受け止め、今後の身を振り方を考える……。

なおリリンは……よほど怖い思いをしたのか……「うう……ああ……ぐすつ」と未だ泣きべそをかいている状態……。

「お前達は充分に戦い、我々に敗れた。それが事実。女王への忠義はもう果たした。大勢は既に決し、程無く戦争は終わる。女王を捕縛した後の扱いは俺が魔王様へ口添

えする。お前達はこれ以上戦わなくて良い。これからはその忠義を俺に向ける。それだけだ」

「……………」

ここまで言われてしまったエリカ、サラ、リリンの三人。

……リリンは既に絶大な魔力の込められたオーラに当てられて服従の意志を見せているが……。

魔導士ではないエリカ、サラの二人は……確かに魔人ジュリアスが持つ魔力はリリンがおしっこを漏らすくらいに強大であると理解した。

しかし、フィジカルのほうは……？ 本当に敵わないレベルなのか……？ のように思案していると――

「ここまで言ってもまだ判断がつかんのか。大方、魔力に寄らぬ技量や膂力ならば勝て

るかどうか、などと考えているのだろう。『身体強化』の魔術があるのを忘れるなよ？ちなみに今の俺はそれを使用してない。掛かって来るのならば生身・素手で相手しよう。ふん、いい加減飽きた。抵抗出来るものならやってみるがいい」

魔人ジュリアスは纏っていた全ての衣服や下着を脱ぎ去り、筋肉質であるが鍛え上げられ一切の無駄がない男性の肉体美を三人の雌達へ見せつけると共に、股間で反り返る程に屹立しびくびくと怒張するバキバキの竿、カリ高のエグイ形状をした男根を雌達に向ける。

となれば魔物……オークやサイクロプスの、巨大で雌を蹂躪するだけの勃起したイチモツに散々女体を貫かれて犯されまくったエリカ、サラ、リリンの三人は最早トラウマとなったそれに「ひいつ!？」と思わず悲鳴を上げる。

そして。

「きやあつ!？」

「エリカ……!!」

魔人ジュリアスは一瞬でエリカの眼前まで接近すると、抵抗する間を与えずに彼女の腰と後頭部へ手を回し支えつつ、彼女の唇を奪い、彼女の口内へ舌を差し入れて、彼女の舌を舌で絡め取るデーブキス……。

「んっ!! んむう! ……んっ、んあ……んっ、ああ……ふあ……ん、あああ……ふわあ、ん、ちゅ、ちゆる、ちゅ、じゅる……ぢゆるる……んああ、ふあ♡」

いきなりキスをされたエリカは初めこそ逃れようと暴れるも、ぬるぬるにゆるにゆると唾液塗れの舌同士が絡まり合う感覚、心地の良い快楽に順応していき……エリカのほうからも男の舌へ自分の舌を絡ませて彼を求め、甘い声を漏らし恍惚の表情を浮

かべる。

……エリカの反応や貌の変化を見たジュリアスはそのまま彼女の肢体をゆつくりと、彼女が寝かされていたベッドに優しく押し倒し……。舌と舌とを絡めるディープキスをしたまま、ジュリアスはエリカの露わな艶肌、大きくまあるく張りが有り形の良い乳房へ手を伸ばし……。

手指全体でそつと鷲掴み、力加減を調節しながら解すように揉み、エリカが最も好い反応を見せる強さにて揉みしだき。

「んっ、んあっ、ふあああ♡ んっ、ちゅ、れろれろ、じゅる、ちゅる、んっ、ああ、ふああ、ああ、ふあ、ん、じゅる、ちゅる♡♡」

エリカが可愛らしくも艶っぽい声を上げ、女体もびくびくと性感を得ている反応をすれば……すつかりぶつくりと膨らんでいる若干濃い目なピンク色の乳首、ピアス穴

も治癒されたそこを男は指の腹で撫で回し、弾くように弄ってやれば……。

「ふあつ!? んっ! ああああ♡ ひうつ! ふあああ、つ、ちゆる、れろ、じゆるるるつ、ぶはあつ、ん、んんあ、ひう、ふあああ♡ んっ、あああつ、んあ、あつ、あああつ、ふあ、んっ、あああつ♡ ……んっ、じる、れろ、んっ! ああああ♡♡♡」

美しい容貌、美女と言って差し支えないエリカは濃厚なディープキスと共に女性の象徴と言える豊満な二つの乳房を、ジュリアスの手により適格に揉みしだかれる愛撫をされて、乳首も全く痛みは無くジュリアスの指によって弄られて昇りつめて行き……甘美な絶頂を迎える。

(なに……これ……こんな知らない……こんな……頭やカラダが蕩けてしまいそう  
な……♡)

大きくびつくん！ と背を反らせて軽めに潮吹きをして男の身体を濡らし、無理矢理に犯され一方的に蹂躪されるものではない、相手を想う性行為による絶頂を初めて経験したエリカは蕩け惚けたような雌の貌をして、すごく心地の良い絶頂の余韻に浸る……。

……以後もエリカはジュリアスにより、一旦キスを止めて唇を離し……エリカとしてはもつとキスをして欲しくあり名残惜しそうにするが……すぐ別の快感、引き続き乳房を優しく揉まれながら……首筋にぬらりとした熱い舌が這い、あまりの性感にエリカは。

「ああっ!! ふあああああつ!! ひゃあああああつ!! ひう、んっ、ああああつ!!  
だめえ! そこだめええっ!! ああつ♡ あああつ!! うあああああつ!! ひうああ  
あつ!! んっ、また、ふああ♡ 来るう♡ ああ来ちやううあああああつ!!」

露わな首筋を、ジュリアスの熱く滑る舌により舐め上げられ、べろべろと舌を這わされて……普段は急所である首には防具を着けていたためか、そこを甘く刺激されてしまつて、今度は大きな快樂の波がエリカの頭に押し寄せて……エリカはやや激し目に絶頂・潮吹き。

それからジュリアスは……再びエリカに優しく触れるだけのキスをして、二度の絶頂を経験して火照り汗ばむ女体の柔肌へ口付けをし、はむはむと唇で味わうようにし、彼女の全身をキスや手指での愛撫をして。徐々に裸身の下を目指し……股間部へ到達すれば。

エリカの、美しく魅力的で淫猥と言える鼠径部を中心に男がぬらぬらとした舌を這わせ。エリカはまた可愛くらしく喘ぎ、ひくん！ ひくん！ と派手目に豊満な肉体を弾ませ、甘イキを繰り返す……。

……頬を紅潮させ、艶めかしく息を荒げるエリカ……。そんな彼女に対し、ジュリアスは。

「ひうつ！ やだあつ！ そこはだめええつ!!」

むつちりとした両方の太ももをジュリアスががっちりと掴み、エリカを大股開きにさせ……。彼女は恥じらい閉じようとするも、魔人であるジュリアスに力でかなうはずもなく。既に魔物たちから無惨に犯され尽くした秘部、女性器であるが。男の手厚い治療・治療により綺麗な状態。

貌を真っ赤にして何度も心地良くも激し目な絶頂をさせられ快楽に浸った身ではあるが、女性の最も大切な部分を男性に見られるというのは恥ずかしく、また、そこを犯されると……。エリカもまだ抵抗が有り。

「ふう、ふう……あなたも……はあ、はあ……やつぱり、ゾレで私を犯すの……？」  
上気し、雌の貌となっているが、強がって警戒心を見せるエリカが問えば。

——ジュリアスは何も言わず、代わりに口を大きく開いて、先ほどまでたつぷりとエリカの素肌を這い、味わったぬらりと唾液に塗れた真っ赤な舌を見せ付け。

「っ！？！？！」

先ほどエリカの唇へしたように、今度は彼女の秘部へ……優しく甘い口付けをして、絶頂や甘いキネリ返し愛液に塗れ、もう十分と言える程に解れた秘部、女性器、おまんこを更に、秘部だけではなく彼女の心も開かせるように、ジュリアスは舌を遣い唇で吸い上げる。

「あつ♡ ああつ♡ ゝゝゝゝつ！！！！！ ゝゝゝゝつ♡♡♡♡」

ジュリアスは、エリカの秘部を丁寧、溢れる愛液をわざと水音を立てて吸いつつ、大陰唇を唇ではみ、尿道を舌先でつんつんとし、包皮から顔を出したクリトリスを舌先でちろちろと刺激。

「んっ♡ ああああつ♡ なんでえ、そんなにっ♡ やさしくてっ♡ 丁寧にい♡  
あああつ♡ もう、いくう、またいくううっ♡♡」

彼女の性行為に対する、あまりにも悲惨な経験からの悪い印象を少しでも拭い去るべく、丁寧、ちろちろいまでのクンニをして、ジュリアスの巧みな舌遣いにより。

エリカは甘ったるい声を上げて啼き喘ぎ、絶頂と潮吹きを繰り返し、シーツを恥ずかしい液体でぐしょぐしょにした……。

なお、男性の舌で秘部を丹念にねっとりぬっぶり舐め上がられるなどという行為な

ど、そういった行為自体を知らなかったエリカはあまりの心地良い快樂に、リリンとは状況は異なるも、少量の尿を漏らしてしまった……が、男は涼しい顔でそれを受け止めた。

「なんだ、あれ……あれが本当の交尾……その前戯ってやつなのか……？ あれなら、私も……されてみたい♡」

「エリカ、あんなにぐしょぐしょになって、気持ち良さそうな声出して、すごい……♡」

魔物たちに犯されるといふ行為と、そもそもの次元が異なり。

更には女性の尊厳をはずたにされて閉ざした心さえも丹念に優しく、たつぷりと時間をかけて解し、蕩ける様な性行為に雌の貌となつて恍惚の表情を浮かべて淫らに……そのうえで幸せそうに喘ぎ、嬌声を上げ続けるエリカの艶姿……。

その様子に、リリンとサラの視線は釘付けとなり、ガン見中……。ちなみに2人のお股はもうぐしよぐしよ。

仲間二人の視線がある中……巧みで、すごく優しく、身体を重ねる相手への想いがこもった丁寧なクンニによって、数え切れぬほどの絶頂をしたエリカはもう何もかもが蕩けてしまったかのような感覚に陥っていた……が。

「さて、エリカ」

「ふえ……？」

ベッドの上に汗だくになり、色々ぐしよぐしよな秘部を晒し、自らその豊満な女体の全てを放り出したようにしているエリカ。

それまで知らず苦しいだけのものと思っていた性行為、その正しい……か否かは兎も角、男女双方が快楽を得られる行為を実感した彼女へ、男は……。

「お前は、エリカは、これが欲しいか？ 一時の問題ではなく、これからずっと、だ。俺専用の性奴隷、雌奴隷になると誓うならば、一生俺専用の『性奴隷、雌奴隷として』俺もお前を、お前たちを愛すると誓おう。どうする？ しつかり考えて答える。無理強いはいしない」

「……」

魔人ジュリアスに問われたエリカはしばし思案をする。……性行為がここまで気持ちのよいものだとは知らなかった。魔族……魔物たちに犯されたときは苦しさや嫌悪感しかなく、まさしく悪夢であり現実の地獄。

セックスやそれに類する性行為は……女所帯であったこともあるし、自分を想ってくれる若い少女の相手をつとめたことは幾度かあった。

が、膣への挿入まではいかない性行為によるここまでこの快楽が存在すると知らなかった。

強い男性に身を預け……包み込まれる感覚があつて、とても心地の良い、抱かれて絶頂に至る快樂も知らない。……あれを、ただ大きいだけではない、愛しさすら今では覚えてしまう彼の、男性のモノを受け入れたらどうなってしまうのだろう……。

……己が忠義を尽くした王国は滅びゆく運命に有り……今後の身の振り方を真剣に考えるならば……。

そこまで考えて、エリカはかけがえのない仲間の二人、サラとリリンのほうをチラリと見やれば、彼女たちは火照った貌、でも真剣な表情でこくりと深く頷いた。……ならば……。

△体験版はここまでです▽